東京春祭マラソン・コンサート vol.11

メルヒェンの時代へ…

フンパーディンク没後 100 年に寄せて

曲目解説

今年没後 100 年目を迎えるドイツの作曲家フンパーディンク（1854-1921）。ドイツ由来の民間伝承を基にした数々の「メルヒェン・オペラ」で一世を風靡した彼を記念し、今回は「メルヒェンの時代へ…」という総合タイトルでお送りする。

第1部「郷／民」

踊ろう！ 踊ろう！ 楽しいよ！ そして歌おう 心から

（歌劇《ヘンゼルとグレーテル》第 1 幕より）

第 1 部は、メルヒェンには欠かせないドイツ各地の習俗や人々がテーマになっている。

幕開けは、1893 年に初演されたフンパーディンク作の歌劇《ヘンゼルとグレーテル》。「メルヒェン・オペラ」の代名詞ともいえる作品から、貧しい生活の中で空腹をかかえたヘンゼルとグレーテルがダンスで気を紛らわせる第 1 幕冒頭の二重唱をお聞きいただく。日本でもお馴染みの、ドイツ縁の民謡が用いられているのが聴きどころ。

《ヘンゼルとグレーテル》をはじめ、ドイツのメルヒェンといえば「森」が欠かせない。しかも「ドイツ＝森の国」というイメージは、19 世紀になると急速に確立されてゆく。その流れに棹さしたのが、1821 年に初演されたウェーバー（1786-1826）作曲の歌劇《魔弾の射手》。今回はいかにも「ドイツらしい」メロディやリズムのナンバーを並べてみた。

ベンデル（1833-74）は、いわゆる「ドイツ語圏」で活躍したピアニスト。作曲活動もおこなったが、その 1 つこそ、幾つかの有名なメルヒェンを音詩風に描き、1871 年に出版された《6 つのドイツのメルヒェンの情景》だ。本日はその中から、特に聴いて愉しい「ブレーメンの音楽隊」を取り上げる。ベンデルと同時代のランゲ（1830-89）も、サロン風のピアノ曲を夥しく残したドイツのピアニストである。後期の作品に属する《愛する人の窓辺で》では、ドイツでもお馴染みの旧き佳き男女の相聞の情景が描かれている。

メルヒェンは、中世ドイツで育まれたものも少なくない。しかも上記の音楽家たちが活躍した 19 世紀は、それまで分裂状態にあったドイツを統一しよう！ という機運が盛り上がり、その中で中世の世界やメルヒェンがドイツ人の精神の源としてクローズアップされた。フンパーディンクも私淑したワーグナー（1813-83）が 1868 年に初演した楽劇《ニュルンベルクのマイスタージンガー》は、その典型（本日演奏される「前奏曲」は、劇中のハイライトとなる音楽を集めている）。ワーグナーに入れあげたバイエルン国王ルートヴィヒ 2 世（1845-86）の宮廷で楽長を務めたラインベルガー（1839-1901）が、1895 年に作った《ドイツ讃歌》とともにお聞きいただく。

ワーグナーとは、様式的にも立場的にもライヴァル関係にあったラハナー（1803-90）。彼もまた、森をテーマにメルヒェン色に溢れた歌曲集《森の響き》を 1834 年に出版する。本日演奏される「森の小鳥」は、その第 1 曲にあたる。

《ヘンゼルとグレーテル》が大当たりした後の 1895 年、フンパーディンクは家庭での上演を念頭に置いた劇音楽《七匹の子ヤギ》を作る。台本は彼の妹で、《ヘンゼルとグレーテル》のそれも担当したヴェッテ（1858-1916）。民族や故郷の礎と見なされるようになった家庭を舞台に、音楽を通じたメルヒェンの継承がおこなわれていった。

（小宮正安）

東京春祭マラソン・コンサート vol.11

メルヒェンの時代へ…

フンパーディンク没後 100 年に寄せて

曲目解説

今年没後 100 年目を迎えるドイツの作曲家フンパーディンク（1854-1921）。ドイツ由来の民間伝承を基にした数々の「メルヒェン・オペラ」で一世を風靡した彼を記念し、今回は「メルヒェンの時代へ…」という総合タイトルでお送りする。

第 2 部「魔／異」

そらホップホップホップ　ギャロップロップロップ　等の馬よ　こら怠けるな！

（歌劇《ヘンゼルとグレーテル》第 3 幕より）

第 2 部は、メルヒェンではお馴染みの魔女や異界がテーマになっている。

幕開けに演奏されるのは、1893 年に初演されたフンパーディンク作の歌劇《ヘンゼルとグレーテル》から、第 2 幕の間奏曲として演奏される「魔女の騎行」と、第 3 幕でヘンゼルとグレーテルを魔法にかけて食べてしまおうとする「魔女のアリア」を続けてお聞きいただく。

「メルヒェン・オペラ」の元祖は、18 世紀後半のドイツ語圏の民衆向けに作られた歌芝居のレパートリーに見て取れる、という考え方がある。たとえば生涯の一時期、ウィーンの民衆劇場で指揮者として活躍したミュラー（1767-1835）の場合。彼が 1791 年に作った《ファゴット吹きのカスパール（あるいは魔法のツィター）》は、魔法の響きを宿した楽器をテーマにした作品であり、本日は「序曲」が演奏される。あるいはこの作品と同年に初演され、現在に至るまで大ヒット作となったモーツァルト（1756-91）の《魔笛》も然り。その中から、魔法の笛や鈴にまつわるナンバーを選んでみた。

《真夏の夜の夢》は、イングランドのシェイクスピア（1564-1616）によって書かれた 16 世紀末の戯曲。メルヒェンの時代を迎えていた 19 世紀前半のドイツでも人気を博し、1843 年の戯曲のドイツ初演にあたってメンデルスゾーン（1809-47）が劇用の音楽を付けた。幻想的な戯曲に相応

しい夢幻的な音楽が特徴で、特に森の奥深くに住まう妖精を描いた「スケルツォ」はその典型である。

ホフマン（1776-1822）もまた、メルヒェンの時代のドイツを代表するロマン派の作家。幻想性や怪奇性に溢れた小説を書くかたわら、音楽家や評論家としても活躍する多彩ぶりを発揮した。そんな彼の作品や生涯を基に、フランスで創作された戯曲が《ホフマン物語》で、やがて同名の歌劇も作られる。作曲者は、ドイツに生まれ、後にフランスのパリで数々の喜歌劇を作ったオッフェンバック（1819-80）だが、彼の生前には完成されず、補筆を経て 1881 年に初演された。本日はゴンドラが幻想的に行き交うヴェネツィアで、ミューズの化身と高級娼婦が歌い交わす「舟歌」を取り上げる。

ホフマンが 1816 年に発表し、話題を呼んだ作品が《くるみ割り人形とねずみの王様》だ。民間伝承ではない、いわゆる「創作メルヒェン」とも呼ばれるジャンルである。なお《くるみ割り人形》といえば、ロシアのチャイコフスキー（1840-93）によるバレエ音楽が有名だが、それ以前にもこの物語を基にした音楽作品は存在した。その 1 つが、ドイツ・ロマン派の音楽家として活躍したライネッケ（1824-1910）が作った同名の作品。序曲が 1855 年、他の曲は 1860 年代半ばに出版された。家庭で演奏されることを念頭に書かれており、ピアノ連弾にナレーションも加わる編成となっている。

（小宮正安）

東京春祭マラソン・コンサート vol.11

メルヒェンの時代へ…

フンパーディンク没後 100 年に寄せて

曲目解説

今年没後 100 年目を迎えるドイツの作曲家フンパーディンク（1854-1921）。ドイツ由来の民間伝承を基にした数々の「メルヒェン・オペラ」で一世を風靡した彼を記念し、今回は「メルヒェンの時代へ…」という総合タイトルでお送りする。

第 3 部「憧／夢」

ふたりは私を連れてゆく あの天国の楽園へ！

（歌劇《ヘンゼルとグレーテル》第 2 幕より）

第3部は、メルヒェンの根幹を成す憧憬や夢想がテーマとなっている。

幕開けには、シューベルト（1797-1828）が 1820 年に作曲した《魔法の竪琴》序曲が演奏される。《魔法の竪琴》は、第 2 部でも取り上げた魔法の楽器をテーマとした音楽伴奏付きの劇だったが、人気を博すことはなかった。それから 3 年後の 1823 年、《キプロスの女王ロザムンデ》（以下《ロザムンデ》）という劇が上演されるにあたり、急遽その劇音楽を担当したシューベルトが、《魔法の竪琴》序曲を《ロザムンデ》のために転用。結果、こちらの名称のほうが有名になってしまった作品である。いずれにしてもシューベルトらしい、現実には存在しえぬ美しい世界への憧れを宿した 1 曲だ。

「ワルツ王」として、ウィーンをはじめとするドイツ語圏で一世を風靡した J.シュトラウス 2 世（1825-99）。壮年期を迎えた彼は、それまで培ったダンス音楽のノウハウを基に喜歌劇の創作に乗り出すが、1871 年に初演された記念すべき第 1 作が、アラビアンナイトを題材にした《インディゴと 40 人の盗賊》だ。劇中に登場する名旋律をつなげ合わせて「新作」として発表されたワルツが、その名も《千夜一夜》。異国情緒漂う雰囲気に、ウィーンという夢の街の代名詞でもあるワルツを融合させた傑作である。

夢想家ということでいえば、ドイツ・ロマン派の音楽家の典型といえるシューマン（1810-56）を忘れるわけにはゆかない。ヴィオラとピアノのために書かれた《メルヒェンの情景》は、その典型。精神の病が重くなり始めた 1851 年に作られ、メルヒェンではお馴染みの森や魔界を彷彿させる曲想の中に、真の憩いへの希求が綴られてゆく。イタリア系の血筋を引きながら、ドイツ語圏で活躍したブゾーニ（1866-1924）が 1879 年に作曲した《メルヒェン》も、こうした系譜の上に成り立つ小品だ。

ジークフリート・ワーグナー（1869-1930）は、かのリヒャルト・ワーグナー（1813-83）の息子。マッチョ志向の父親の影から逃れるように、メルヒェン・オペラや、繊細な感覚に基づく器楽曲を残した。1913 年に作られた《フルートと小管弦楽のための協奏曲》もその 1 つである。

ワーグナーと同時代にドイツ語圏で活躍した音楽家のヒラー（1811-85）が、1860 年頃に作曲したのが《小姓と王女のバラード》である。古城、森、水の精といったメルヒェンでお馴染みの要素が、小姓と王女の束の間の悲恋を彩るという内容。ピアノとナレーションという編成からは、家庭における上演を念頭に置いたものであることが窺える。

本日の演奏会の最後を飾るのは、1893 年に初演されたフンパーディンク作の歌劇《ヘンゼルとグレーテル》から。森の中で迷った兄妹が天使たちに祈りを捧げながら眠りにつく、あまりにも美しい第 2 幕の最終部分「夕べの祈り」「夢のパントマイム」を取り上げる。

（小宮正安）